

私の三十句

端 つ こ

岩 瀧 如 雨

端つこの孫の名を訊くお元日
七種の夜も望みて残り粥

△青▽

薄氷をいくつ苛めし傘の先
老い至福大川端の花疲
遠山のあれば詩になる葦かな
恋猫の勾玉のごと寝ねにけり
溜息も吹けば虹色しゃぼん玉

△朱▽

昼の日の暗みて歎呼雨蛙
炎昼や朱色気怠き中華街
猫の知る風の道あり夏座敷
息荒き男鹿の太鼓や宿浴衣
厳めしき山も寝そべる大暑かな

△白▽

秋晴や同じふるさと語りけり
この穴は誰の近道木槿垣

晚菊や老いを自慢の待合室
遠祖も通りし畦や曼珠沙華
冬近し嵯峨野の奥の石仏

△玄▽

山褰を瞭かにして冬に入る
実を枝にいのちまつたう柿落葉
長旅の神も寛ぐ小春かな
後退るほどの山容寒に入る
早梅や二の腕細き早生れ

△さと▽

その昔は牛などをりし春田かな
大青田伊達は六十二万石
北風やとほき縁ある墓一基
ふる里の咳には訛無かるべし

△さけ▽

酒徒となる懐旧の宴余花明り
新酒酌む五臓に感謝そして詫び
鰯酒の青き炎と遊びけり
ジンに浮く氷音澄む霜夜かな

（俳句を始めて十五年。三十句を選んでみて、あらためて今なお端つこに居ることに合点がいました。）